

南瓜

蛇鳴いて南瓜の花落ちよけり
丸裸南瓜かゝるて戻りりり

麻

刈麻やどの小娘の戀衣
麻刈りて屏風に淋し山の影
日の入りや麻刈りあとの通り雨

麥

行列の槍 五六本 麦の秋
麥刈つて疫のちやう小村かな
麥藁や地藏の膝さらしかけ

元山のかくとりて 麦の秋

須磨

入口に麥干す家や 古簾

夏雑

須磨の閑所の跡といへり

瓜茄子どこを閑屋の名残とも

秋

立秋

秋立つとさやかよ人の目さあけり

秋来ぬと柱の拂子動きけり

白雲ふ秋立つてまだ地ハ暑

霜庭の橋上落ちこみぬけさの秋

客舎

秋立つやとちらを見ても人の國

須磨

秋立てば淋し立たねむあつとらし

秋立つと何を雀の早合點

須磨保養院ある頃遊人はいらた
りとて罵りさわぐにわねも物をいれり
やがて明け行く程に次の日立秋なり
くれむ二句

初秋

けさの秋まきのふの物と取られけり
のーりー人静すてけさの秋
秋立つやほろりと落ちし蟬の壳
初秋の枕小さき宿屋のり
初秋の日脚をいこむ朝寢なる

初秋の簾に動く日ありーか

残暑

裏窓よ夕日さーニむ残暑か
草山よ残の暑さやまだりはけ
砂濱や残の暑さをほのめらす
廣嶋に己瓢亭よ分るる
餞別に汗衫をゆるふ残暑は

いやはか
冷かき運の北月中の入日かな
冷かき寤寐覚や山の雲深き

古白の舊庵よりたゞる虚子に
寄す

尻の跡のもう冷かみ 古 暈

身又 學ぶ夜の更けて身み入む昔火

すさかじ 鉄輪

すさかじや燧燭をる風の中

朝寒 朝寒の雀啼くなり 忍 竹

朝寒や蘇鉄見に行く妙國寺

朝寒のはらりくと根笹かな

朝寒や起つて廊下を徘徊す

朝寒を日に照らすと首途は

朝寒の旭を待つ人や舟のへり

み教陰に石切の音の朝寒

朝寒や今日の天氣を啼く雀

朝寒の風が吹くなり雪の不二

觀山心洞の墓に詣で

朝寒やひとり墓前にぶら下る

正宗寺一宿を訪ふ

朝寒やたのもと響く内玄関

須磨

昇る日や朝寒の松み雀鳴く

夜寒

白波のきはみ火を焚く夜寒は
妙法の太鼓聞こゆの夜寒は
佛壇のともし火消ゆの夜寒は
丁々と碁を打つ家の夜寒は
鼠狩れむ鼠の突ふ夜寒かな

菽村に旅籠屋もなき夜寒は
首途の用意して寝る夜寒は
次の間の灯も消えて夜寒は
蜘蛛殺すあとの淋しき夜寒は
門附の下町通る夜寒かな
辻鴛籠に盗人載せる夜寒は
灯をともしす家奥深き夜寒は
さし向ふ夫婦の暎の夜寒は
いさり火を横に見て行く夜寒は
旅籠屋の居凡そぬるき夜寒は

不忠の池をめぐりて 夜寒かた
傾城子袖引かれたる 夜寒か
出女の油をこぼす 夜寒か
片里に盗人たゆむ 夜寒か
船子寐て岡の灯乃滅る 夜寒か
釣橋に提灯わたる 夜寒か
大寺に一人宿かる 夜寒か
鼠追一む三匹逃けり 夜寒か
ねもてかり見ゆや 夜寒の最合風呂
木曾川に向くや 夜寒の門構へ

通夜堂よりまたき 夜寒を覚えける
夜寒さや人静まりて 海の音
夜寒さや家なき原に 灯のともる

陰房鬼火青

人住おぬ戸子灯のうつる 夜寒か

船中

知らぬ女と背中 念せの夜寒か

運坐

黙りけり 夜寒の男 五六人

三津にて諸友を別る時 戯れよ

狸伴よ贈

獺と狸の送る 夜寒うら

須磨 三句

灯ともさぬ村家つゞきの夜寒は
蕎麦はあれど夜寒の温鈍きこゝの世
須磨寺の門を過ぎ行く夜寒は

奈良角定に

大佛の足もとに宿る 夜寒は

即景

灯更けて書読む窓の夜寒は

肌寒

肌寒や多引き習ふ小段原
浜板の寒勝りなりて肌寒

布袋の眠りたの画に

風引くな肌寒頃の臍の穴
砂川や浅瀬に魚の肌寒
や寒み机子 向ふ背くおわり

漸寒

霜月来

や寒み襟を正して坐りけり

坐寒

うら寒や綿入着たる小大名

夜長

明けぬれみ立ていそげバ夜を長き
長き夜を何に更かすぞ岡の家
蠟燭の燃えきれんとして夜を長
長き夜の硯よりつゝともし
長き夜の連歌に更けて朝寐か
長き夜の難や太鼓や喇叭か
長き夜の面白きかな水滸傳
寐らぬめよ長き夜頃の物の本

長き夜や人灯を取つて庭を行く
長き夜や提灯わたる大井河
長き夜や夢み拾い一貫文
神戸出て夜の長さよ紀州灘
大村の静まり返る夜長丸
下女郎屋の話聞ゆる夜長火
長き夜や木の間に細き常夜燈
長き夜や初夜の鐘撞く東大寺
長き夜や古傾城のたしめ言
夜の長し船で測れむ八十里

長き夜の夢の浮橋絶えてなり

有感

長き夜を月取の猿の思案が

花のたの画

長き夜の月の雨のと更けて行く

富居酒家近一

長き夜や隣樓の三弦引きかみぬ

大鼓かみ鼓かみ三味の夜を長き

待戀

足音の隣へはいる夜長かな

秋の夕

鎌倉や秋の夕日の旅法師

誰耳なり秋の夕の渡一守

秋の日の一人に暮る野道に

水流れ雲行く秋の夕かな

馬鳴いて秋の日暮る別れに

有感

契りたを待つや夜長の空たのめ

謡曲正尊

長き夜の物音聞くとや白拍子

秋の日の傾きとわれ家を

三津濱

海晴むく小富士も秋の日くたたり

秋の暮

本陣や下手な掛畫も秋の暮
尾の道の便船も——秋の暮
半行くや毘沙門阪の秋の暮
此頃は辻君見えぬ秋の暮
聾と盲と啞と秋の暮
淋——さや氣車猶急ぐ秋の暮

驢み来りて山陰急ぐ秋の暮
藪寺に磬打つ音も秋の暮
誰人を睨んで通る秋の暮
大佛をまはさば淋——秋の暮
老僧に棒加へけり秋の暮
山本の一むら杉や秋の暮
棺通る四條の橋や秋の暮
秋の暮狸をつれて歸りけり
秋の暮わらふと許り鐘を撞く
秋の暮大船をかりりけり

秋の暮春之病の拙摩 秋と見よ

源磨

めづらしや海に帆の無い秋の暮

題画

琵琶やめて何が聞えぬ秋の暮

諸友に三津迄送らんとて

酒あり飯あり十有一人秋の暮

田別

十一人一人もなくなりて秋の暮

再び源磨を東りて

ちかづきの仲居も居らば秋の暮

歸京途中

日蓮の死んだ山あり秋の暮

田別

漢の國

いさよしく別れてのちの秋の暮

八月 八月を凡に淡路の船がり

高濱

八月に樓下よ満了 汐の音

二百十日

大佛に二百十日もまのり
内海や二百十日の釣小舟

龍田姫

龍田姫四十載えぬと申しけり

暮秋

行く秋の鳥も飛んでいさひ
行く秋の涙もなほありけり
秋行くと砂糖木島の荒れ
行く秋や店も元はたる春日盆
行く秋や奈良の小寺の鐘を撞く

行く秋や奈良の小店の古佛
行く秋の月夜を雨に
行く秋の野菊白くも咲まけり
行く秋や庵の夕を鴉鳴く
行く秋の眼を塞きたる一人
行く秋を糸糸はる雲も
行く秋の橋杭はる残りけり
行く秋の敵國近し
市中やわづら秋の行く夕
月もあり黄菊白菊暮る秋

世の中の秋か行くをよ都人
寺々に秋行く奈良の月夜かな
結紅葉青紅葉秋の行く小庭
蜘蛛の巣の獲物も無し秋暮る
笠帯木の笠帯にしあらず秋をぬ
賣れ残る木魚一つ秋の行く

芭蕉の像を題す

此君にわさる秋行く四畳半

余戸手引松

行く秋や手を引きあひし松三木

感あり

行く秋の我は神無し佛無し

松山を立ち出づる時

行く秋のまた旅人と呼はれり

客舎を臥し

行く秋の腰骨りむ旅宿に

須磨より奈良を臥し

須磨に更けて奈良より行く秋を

三月堂

行く秋や一千年の佛たち

法華寺

尼寺や寂莫と——て秋の行く

法隆寺 二句

行く秋と——づればけり法隆寺
行く秋と雨の氣車待つ野奈屋

歸菴 三句

行く秋を生きを歸り——都々
行く秋の死ふきこたひが歸りけり
行く秋や菴の菊見る五六日

九月尽 易を點——光の卦に到り九月盡

冬近 我庵は蚊帳の別れて冬近——

羽管五徳など画きたるに

冬待つや寂然と——て四疊半

秋時候雜秋冴えたり 我れ鯉切らん水の色

秋澄みたり魚中み浮いて底の影
秋の城山は赤松をのりかな
秋晴ぬぬ空の限りの蒸氣船

秋晴れて西國橋の高さか
奈良の秋の唐招提寺西大寺
汽船過ぎる波よる秋の小島か
杉木立淋しき秋の島居か
鈍くちりそ猶憎き秋の毛虫か
花細し秋よわらふ野撫子
夕禁中漁村の秋の静かたり
雪やどる秋の山寺灯とるわら
奈良淋し萬葉の秋を見付けたり
古里や秋よ瘦せたる小傾城

三條小橋柳秋なり人稀なり
くわらくくと何み火を焚く秋の村
旅人の盗人よ逢ひぬ須磨の秋
淋しきや盗人をゆる須磨の秋
一輪の天竺牡丹活けて秋
人もたし杉谷町の藪乃秋
湖の細りくして瀬田の秋
病起杖よ倚れむ千山万嶽の秋
青うと猶淋しきよ須磨の秋
来て見れば風が吹くあり須磨の秋

人去つてすまがく———すよ須磨の秋
旅人や寒かりま来々奈良の秋
西東 山みか———よ々奈良の秋
禅寺や十ほえん青き庭の秋
槍持やいとりたろれ橋の秋
山をでてそらに悲———里の秋
山遠く湖はるかあり三井の秋
百日紅梢がかりの寒さあり
須磨子に在る頃都の人より菓子
をわづらう———た

うら———き菓子贈らも———須磨の秋

燈火漸可親

猿蓑の秋の季あけて読む夜は

豊太閤書簡のうら———

七月十三日らん々と書きし今秋

一宿来。

あづら———や僧来て秋の運坐は

松山まで京に上る人と送。

故郷の淋———き秋を忘———な

松山城

秋高——葎葉い沈む城の上

松山郊外

秋晴れ見え隠れぬ——ま山の上

千秋寺ニ句

山本や寺ハ黄檗 杉リ秋

画をかきし僧今あらお寺の秋

自著俳話の後ニ題す

破水鐘や敲けども秋の聲あらず

松山南郊薬師

寺清水西も見えぬ秋老いぬ

嗽石ニ別ノ

行く我よとよまの汝も秋ニつ

碌堂ニ別ノ

秋三月馬鹿を尽して別ルク

碌堂ニ戯ノ

碌堂といひける 秋の男かな

花火

人かへる花火のあとの暗さ
城山の北よとびらく花火かな
鳥飛んで日の落ぎはの花火
道見えて周上り行く花火
音もきき——松の梢の遠花火
雨雲に入りとけ開く花火
晝見れば小旗立てたり花火舟
夕花火虹の浮橋砕きけり

扇置 置扇拾ふて箒も物狂い

扇捨て手を置く膝のもののうさぎ

傾城の画

忘れたる扇返さん君かもと

捨團扇 白頭の吟を書きけり捨團扇

捨てらるゝ厠に古りし團扇

捨團扇遊女の顔のあはれさ

捨團扇看の具月にまじりけり

七夕 七夕を参らぬ御代も戀男

七夕わたよをよまの涙 雨
●船に寝て星の別を見ぬ夜は
行水ちやふんどー代貸さん男七夕
七夕は七鳥の聲よて明けみり
梶の葉に書ききたなやみたの女は
七夕や蝶の振舞おもーあき
七夕にソ早復を代貸すわ小傾城
雲のさき星別と覚ええり
牛載せて喜迎舟漕き出ぬ
舟橋に七夕竹のかりけり

橋をな— 鵲を飛んで— おいり

魂祭

おろろかまなりおさる世の魂祭
孟蘭盆や無縁の墓も鳴く蛙
聖霊の寫真に憑よや二三日
魂祭の門を現くや物狂い
禰宜殿や門を出づるバ盆の月
満州討死の墓を画きたは
孟蘭盆の鵲鳴くや 墓印
病中

病んで父を思ふにや魂祭

戦後

魂棚やいとさを語り人二人
討死の位牌新らー山の馬

草市

賣れ残りの露けーや草の市
草市や人あはらむ宵の雨

燈籠

垣にに見ゆ隣の燈籠も
燈籠とともーと留守の川家火

賤が燈端干魚燈籠甘番椒
人呼ぶや燈籠並べし道の端
たしれ男の遊具祭の燈籠小
孝行のしたい頃には燈籠小
灯ともますせなよめく切籠
妖怪体
たをやめの是もと暗き燈籠小

高燈籠山の端や晝見の寺の高燈籠
日の入や星のあたりの高燈籠

火が消えし雲がかりし高燈籠

走馬燈 同ト事と廻燈籠のおけり

麻焚 迎火や父に似たる子の顔の明り

いふたよへ迎火焚てよみらん

送火の心えたるかぬ月夜に

燃えぬて麻木の煙西へ吹く

生身魂七十と申し造者

墓恭 家族従者十人許り墓恭

棚經 棚經や小僧面白さうに讀む

施餓鬼 残の蚊の瘦せてあはれや施餓鬼棚

淋しや施餓鬼のあはれ火の光

施餓鬼舟や読王と信ぶし

大文字 大文字に片類すばゆき徒来

盆過 盆過のハ草生えたる墓場ハ

角カ わづらふと聞けハあはれハ角カ取

筆使いと今宵も角カ取りけよ
年若く前齒折りたる角カハ

踊 歌垣の世ハ変りたる踊ハな

なおとさき漁村の月の踊ハ
よま人の袂觸ルたハ踊ハハ

かふ入 かふ入もせぬ迄老いぬ秋の風

站 玉川ハ夜毎の月に砧打つ

砧うつ五條あたりの伏家ハ
人選し砧打たりよ更かき
舟ハ寐よ大津の砧三井の鐘

長安ハ片月萬戸擣衣聲

夕月ハ砧圃中の城の内

秋聲

市の中や砧打ち絶えて何の聲
よめ入りて餘所の砧を打ちおとくま
安木山子こーらへて安木山子負い行く山路ハ
人に似て月夜の安木山子ありしあり
男むかり●と見えそ安木山子の哀れし
と見ても安木山子に耳はなかりり
笠ぬけて手拭かぶる安木山子ハ
兼平の塚を安木山子の矢先かな
草摺のちぎれして高き安木山子ハ
人立つて鳥追舟の安木山子ハ

鳴子 わいて誰鳴子に鈴の音すなり

親が子が妻が代りて鳴子ハ
あゆよく鳴子に鳥の飛ぶことよ
餘り淋し鳥やと飛いせ鳴子引
五六間に鳴子尽また山田ハ
田ハ刈りぬ鳴子の繩のすぢか
鳴るるな風よあかす鳴子ハ

新酒 二三匹馬撃おきたり新酒ハ

狐啼いて新酒の酔のさめより
竹の凡新酒の酔を吹きまくり
思ふこと新酒の酔をこいまいり
君今来ん新酒の酔のわき上り

濁酒 濁り酒 木蘭いこさより帰る

後彼岸 枯梗折つて露のつら立つ彼岸

木棉取 木棉取 高雄の紅葉まだ早し

菅干 菅干す 壁に西日のあかり

毛見 駒とめを 何事向ふをも見の人

落水 日焼田やニ及ハからき 落水水

新田や沙みきし あり落水水

おかしらわ田毎の月の 落水水

崩葉 崩れ果杭一本 残りけり

鶉引 夕焼や鶉の細に人だかり
細あけて鶉ららばる瀆邊に

鳩吹 藪陰や鳩啼く人のあらばる

鹿笛 猿啼かて鹿笛の夜を淋しれ

つと人 つと人らでうき人の門を過ぎたり

叔摺 詩經より叔摺歌を入れたるに

露

白露に濡る不動の火燭かな
曉の骨に露置く焼場は
蓬生や秋類たしる露の玉
柴門孤より誰か住み捨てし露の庵
旅籠屋の戸口で脱げたる笠の露
草の戸内いぬもす深き苔乃露

白露や葎の誰の捨車
白露や芋の畠の天の川
朝露の槍の柄つたふ閑屋を
白露や冷えつてしたる捨首丹
火らりく誰人寐たる露の中
竹藪の露の濡れたる夜明け
露けしや朝日の昇る小松原
朝露や飯焚く煙草を這ふ
けさの露ゆふべの雨や屋根の草
白露や山分け入ルハ草の露

山陰の橋朽ちんとす 晝の露

三師非樂戰之子慎佳兵

己むむくむ見事よむらへ劍の露

法隆寺

佛舍利とこたへて消えよ露の玉

蓮華師寺佛足石

千年の露も消えくぐり星の跡

春日社

灯とすや露のーたる石燈籠
露や置く神の灯まりとるは

稲妻

稲妻や、片帆も落す 海の上
稲妻や折れ見せし雲の峰
稲妻よ紅粉つけて居る遊女
稲妻や少しへたて、二とこら
稲妻の砕けた青い藪の奥
稲妻に松明暗き野道かな
稲妻や横幅廣く折れて出
稲妻よまわやと投けた、碇かな
稲妻や三井から見れば勢田の上

名月

漫たる海のをこどりくわの月
其月ハ雨がうら—こ名のこよひ
精進のこよひよ廿落ちて月の空
名月の山をを彩る山々—

名月や篁子に並ぶ僧の影
新立や橋の下より今日の月
無雜作に名月出たる島かな
歸ささや此名月に鳥啼く
名月や雞鳴いて静かき
名月や夜明の鐘をうつ時は
名月や半分出たる室根の上
名月や雲一ちぎれ三ちぎれ
名月や山みのほれハ山の雲
名月や千石船の人だかり

空に満つる雨跡の中より川の月
舟に橋より物干に皆月見
月見の流さる身の中
物干に大阪人の月見
方丈や月見の客の五六人
元山よあしはらぬ月見
豆のあと畔道ありく月見
侍の朱鞘を出たつ月見
正宗寺と
名月や寺の二階の瓦頭口
月見

月芒拂子線香 禪坊主

松山を立ち出づると

見い出の月見もさきんふれり

達摩替

兎角一乙九年の月見友もなし

待宵

待宵や十日の雨は晴れもく

待宵を見たりあしたはなほもかき

十四夜

日と月の睨みあいり 西 東

十六夜

十六夜や又酒のみ乃言い草に

月二夜三夜さめもや日雲りり

月四一各は十六夜とかはりり

十六夜や月におとす 迎い船

十七夜

辻君の辻に立待月夜かな

二十月

あら波や二日の月を捲いてき

武藏野や鳥啼いて二日月細

子まおけこすむ失いたる人

つづをす

月たすらむ二日の月とあまふらあふ

晋月 山寺や足下雲暗れて三日の月

後月 我園に日蓮ありて 名の月

流車中一のこ

名の月 是柄山日て明けみく

月 月暗し一筋白き海の上

月出で、波静よりぬ伊豆の海
月かきし一内通堂の歌の會
月真丸船のへさきに上りく
橋の月誰人柱 泣く夜か
夕月や松影も落つる坐禪堂
夕月や上に城あゝ屋の下
有明の落ちて周防の山遠し
さくくと月昇りく海の上
下駄の音外を月夜と覚えたり
廿日過の月ハ出でたり松の北

更科や月に落ち念ふ僧三人
山丸く大きな月の世をみけり
山既よ月を吐くべきけしき
小式部が月今出てぬと殿けり
むつきりと月現れぬ寺の上
家孤なり月之落ちかゝる草の上
観念の月暗水にけり我一人
笛の音に月之落ちかゝる紫の
空城や人なき月よ汐の音
渺々と沙漠のなを月一つ

めづらーや始めを見たよ月の不二
鯉をわて池の面暗き月夜は
須磨の海の西に流れて月夜は
家四五軒石狩の野の月をなし
あゝが中に詩人瘦せたり月の宴
溝川の泥鰯泡ふく月夜は
武藏野や大きくと出たよ晝の月
夕雲やたまたまつて出たよ峰の月

須磨夜景

月昇り紀伊と和泉の堺より

須磨にて

読みさして月が出るなり須磨の巻
藍色の海の上なり須磨の月

河辺道途

やむや月見て居れむ水の音

東坡赤壁圖

月の間へ東坡いづくみかきりしと

蕉門十哲の図

月の座や人さあぐの影法師

奈良

月上の犬佛殿の足場かち
礎を尋ねてよよ月夜は
旅

菅草葺の家み宿借の月夜は

中野道途を吊ふ

鶴鳴いて月の都を思ふは

空臨出世界

月高——空りつめた山の上

秋風

絶壁の草——動きけり秋の風

晝の灯や本堂暗く秋の風
馬下りて川の名問へむ秋の風
櫓や下るのむけむ秋の風
浅草や猿飼ふ店の秋の風
黒崎や汐早うて秋の風
山陰や寺吹き暮るも秋の風
ほし店の鬼灯吹くや秋の風
元山を越えて吹きけり秋の風
数寺の釣鐘もなり秋の風
せまり吹くや音頭が瀬戸の秋の風

船ゆれし音頭が瀬戸の秋の風
とよし火を見れむ吹きけり秋の風
船よすも築嶋寺や秋の風
晴れきつて秋風荒る朝日小
中空の秋の風吹く峠かな
瀬戸二町中を秋風吹いて来り
秋風や侍町は堀をかり
秋風や雲吹き起る山のかい
秋風や白雲迷ふ親不知
秋風や馬嘶いて幕の音

出征

秋風や馬合點一て北の方

征夫を憶ふ

秋風のをなたと許り思へとよ

奈良良九句

秋風や困ひもたりに興福寺

秋風や吾は奈良の病人なり

陵をめぐりて吹きぬ秋の風

秋風や奈良の佛も札がつく

右京左京中は畑あり秋の風

般若寺の釣鐘細一秋の風

奈良阪や石切る家の秋の風

古里や小寺もありて秋の風

秋風や皆千年の物むかり

東大寺三句

大佛の尻より吹きぬ秋の風

大佛の大きき知れぬ秋の風

秋風も吹かれたわいな仁王式

須磨寺

秋風や平家吊お経の聲

須磨よこ

名所に秋風吹きぬ歌よおん
飄亭六軍に征いて遠東の
野に戦ふと一年命を砲煙
弾丸の間に~~命を~~帰す
われをよと神戸須磨よ病
みて絶えんとす玉の諸君
くもるに緊きとめ~~つ~~ついに飄
亭に逢ふことを得たり相見
て惘然言ひさづき言葉もなき

秋風や生きたるあひ見の汝と我

貧民家の園よ

泣く母も笑ふ其子も秋の風

ちよめて古白の墓を訪ふ句

我死なで君生きたるで秋の風
吊つむわらふ吹きさけり秋の風

道後公園

水草の花まだ白——秋の風

石手寺の御園の二十四凶病事
は長引し命も~~は~~けり——しと

あり

身の上や御園を引けむ秋の風

石手寺

秋風や何堂彼堂彌勒堂

常樂寺

狸死ふ狐留守なり秋の風

病中

三十の阪見あぐれむ秋乃風

松山南部

秋風や焼場の跡の卯塔場

道後寶教寺

色里や十歩をなれど秋の風

能樂満仲

とよかくよ一人の失せぬ秋の風

留別

送られそ一人行くあり秋の風

故郷の蓴鮓といたしといじ

今のあるるか

秋風や高井のていれお三津の潮

廣嶋へわたりて

来て見ればさうにも吹くや秋の風
再び須磨を来りて
人も居らばほろりも立たば秋の風

初嵐

初嵐 櫓の足場崩れ
初嵐 小不二ゆかんで見ゆ
初嵐 五重の塔より上りけり
初嵐 軍艦悠遊と来て来り

野分

おごくと月さ——上る野分

比良こころそ 湖水に落ち野分
栗の穂のくたひれも野分
電信の柱を倒す野分
無住寺に荒れたまの野分
釣鐘のそはし寄らぬ野分
豆腐買ふて裏道疾の野分
侍乃足駄めんはる野分
吹き返す不二の裾野の野分
方十町砂糖木島の野分
山島の尾を吹うれ居る野分

天の川

峠より真下みたらす野分は
大粒な日生吹き飛ばす野分は
帆柱の山もたまたま野分うら
旅人の吹きまよくられ野分は
大佛の鼻の穴から野分うらな
雲ちまね雲飛び野分雨もあらす
野分一して野の低くなよあーた
野分荒れて羽傘の廉に押さるる女は
楫を絶えて舟も見る夜の天の川
七夕の足たもと見えよ天乃川

霧

峠より平らに流ちぬ天の川
竹藪や着子に落つ天の川
絶頂や銀河さへる剣山
天の川海の南へ流れけり
天の川瀆名の橋の十文字
晴れたとて此大水の天の川
島消えそ舟あらはるる霧の中
中天子並ぶ岩あり雨霧の奥
清水の屋根あらはるる霧の中

村も見えお竹藪青一霧の中
消えぬ朝月濡る霧の中
山里や米つく音の雨霧北中
心細一我船遅き灘の霧
屋の棟や草よからよ朝の霧
先陣は雨霧中陣後陣一
山陰や雨霧濡れたる村一つ
山本や日のさす霧を出る鴉
山々や霧吹きおらす奈良の町
山裡に朝霧わく峠のれ

かけ橋や雨霧の底行く水の音
朝霧やもろこし船の何さわぐ
霧間よりあらねいたるの兵船
霧晴れを雲飛ぶ山の四みど

海濱眺望ニ句

見ゆよまきお自奥も霧の十八里
朝霧や海を限りし伊豫の鼻

秋

旅鳥一羽に秋の入日のな
秋の日の高石懸み落ちまう

大根の二葉に秋の日さし
山に倚れを秋の日落つるおら野々

奈良

石手寺

秋の日比木の間に落ちたる塔高し
護摩堂にさしこむ秋の日あり
秋の空 晝中の月宙にあり秋の空
見あぐれを塔の高さよ秋の空
清水や舞其の上の秋の空
湖の上よ置きけり秋の空

東雲神社

社壇百級秋の空へと上り人

秋雲

秋の雲湖水の底を渡りけり
岩山の木もなし秋の雲はな
秋の雲地獄の底へ吹き落す

秋雨

秋の雨相をいたぐく小山水

星月夜

近江路や瀬田迄来て星月夜
戸口迄送つて出れを星月夜

大佛が真黒なるは 日月夜
三井寺や湖水の上の 日月夜
ちまなくと黒き村が 日月夜
星月夜 原の一本杉 高し

秋海

門を出て十歩も秋の海廣し
那古寺の椽の下より秋の海
秋の海鳥飛ぶ方にいらがたり
秋の海音頭が瀬戸を流れり
大船の秋の海面ゆさぶりぬ
秋の海舟一艘もたのりり

秋の夕日暮るゝや空のをより 秋の夕

初夕 初夕や海ゆりこゝて草の上

初汐や河豚遊び居る亭頭の内
初汐の上ふ灯をもす小島かな
初汐を松四五本の小島かな
初汐や千石積の船おらり
初汐やゆらゆらも橋をくぐる船

花野

の雫りつめ——^山平らかなみ花野は
たし——ろわ小道尽きたる花野原

野の錦 野の錦 晝の茶礼通りけり

刈田

三四日見ぬ間に廣き刈田は
いろくくと日のまほちかゝ刈田は
夕陽や刈田を長き鶴の影

秋山

山門を出て下りけり 秋の山
野徑曲けり十歩の中に秋の山
七重八重かさきありあひぬ秋の山
道尽きて雲起りけり 秋の山
雲迷ふ笠原の下乃 秋の山

秋水

竹の窟南に秋の山近
四方秋の山をめぐらす城下
秋の山御幸寺と申し天狗住む
秋の山五重の塔子並いけり
秋の山杉林とて常信寺
秋の山中石鉄山高
秋の山突元とて寺一つ
秋の山仙人橋の高さうれ
此頃や泥割居らば秋の水

山陰や日ありわさし秋の水
静のやに磔打ちけり秋の水
打ちこみし磔沈むや秋の水
石塔の沈むも見え秋の水
鳴かぬ鳥の飛んで過き秋の水
底見え魚見え秋の水深
秋の水泥づまつて魚かな

御幸寺山の麓

秋の水澄み天狗の影もな

秋の川 蓼多短く秋の小川の溢れたり

鹿

萩の上は寝ころびしうち鹿の腹
有明や寐ぼけしうち鹿の顔
晝の鹿来しや人なき博奕宿
春日野の女鹿呼ぶ夕かな
鹿鳴くや杉の梢の二十日月
わりをーや妻追ひよす晝の鹿
煎餅をくちまききり神の鹿
月雲に隠れし悲し鹿の聲
岩鶴や月にうらむく鹿二つ
岩鼻や真向に細き鹿の尻

奈良 五句

鹿鳴くお小窓の外は薄月夜
鹿聞いて淋しき奈良の宿屋か
奈良の宿悲しく鹿の鳴く夜は
とも火や鹿鳴くあまの神の杜
鹿も居らぬ樵夫下り来る手向山
燕の歸ると見北を戻しけり
燕の帰ると淋しき藏のあひ

燕歸

渡鳥
およそ来るわ小島小島 雁の雁

とつとつと日本へ渡り鳥
旅僧やいとつとつと西国へ渡り鳥
晝凄し沖の嵐の渡り鳥
●小嶋の陸へ五町の渡り鳥
旅人の馬はがらや渡り鳥

雁

雨の雁いとつとつと雁風の月を見よ
雁もあつとつと入江見おらす山の上
月の雁をうつとつとさわぐ田面か
雁の聲蓮尽く破れたつとつと

雁の聲 旅の聞かぬを
雁鳴の夜も一雁の旅十日
飯櫃の雁の落ち来る堅田
旅枕雁が鳴いても目があ
行水の首筋わたる雁の聲
投げ出したやうに山から雁の竿
長橋をた子見てや落つる一雁
大都秋雁少只是夜猿多
ちかくに猿聞きかたて雁の聲
送人之朝鮮

鷓

出征
朝鮮へわらわ雁と行き逢ひ
妻や子や野宮夢さめて雁の聲
鷓鳴くや毒鎌を取つて戸を出づ
六尺の竹の梢や 鷓の聲
馬士去て鷓鳴いて土手の淋しきよ
いそがしや誰か追はへて 鷓の聲
雨の村暮れをけと鷓の声淋し
霜月村居
鷓木に鳴けを雀すゝや 瘴の上
和

鳴 鳴立つとあはれものなき 入日

鶺鴒 潤静かき鶺鴒の尾の動き

鶺鴒や浪うちみし岩の上

鶺鴒 鶺鴒鳴いて杉の下道晝凄

山は雲鶺鴒鳴いて奥深

鶺鴒 ちもろくと粟の穂がくん行く鶺鴒

色鳥 色鳥や一むら鳴へかれ行く

目白 目白 目白 目白 目白 目白 目白 目白 目白 目白

木隠れ目白の覗く雀かな

山雀 山雀の来り時は四五羽来り

朝鳥 朝鳥の来れぬ日 朝鳥

落點 瀬の音や月夜み落つる點もあらん

海へ五里一日に鮎や落ちらん

鮎鮎

題画

さびたりな茄子の紫 鮎の腹
何とて鮎いさいたを取られたぞ
堀江鰯釣り得て帰る 鮎かき

鱸

河鹿

獺みみみつけられて河鹿鳴く
河鹿鳴く宿と答へて山深し

蟋蟀

草刈つて枕を遠しきりくす
吉原の太鼓更けたりきりくす
大寺の竈は冷えそきりくす
馬の息とくくあゝりのきりくす

須磨

晝鳴いて子に取られくきりくす

虫

虫鳴くや高にたどろく 地藏尊
虫鳴くや七堂伽藍 何もな
虫の音一審 雞の 鳴きよる

虫鳴とや梅若寺の女院青蓮堂
笠塚かや晝の虫鳴く石の下
嗚みおせしあこび念佛魚の声
奈良

虫鳴とや金堂の跡門の跡
松山より帰ると秋の夜の肌寒もい
と無が頃頃忽ちとこくと音
て歌いしらから外を過ぎ行くこと
れば何をも聞けむこれなん子供
等が太鼓刺しとをしゃーまてー

蟬

蟬や承座の邊に暮すあり

初捷會のよぬをすまふとを
かしくもけきまふや
行列の太鼓退きあり 虫の蟬

響虫

響虫 夜討り来べき夜をよび

鈴虫

鈴虫よ鳴け詠の月詠の雨路

須磨保養院

鈴虫や凡言場灯消えて松の月

蜻蛉

蜻蛉や何そらさしきよとの枕

赤蜻蛉地藏の顔の夕日也

蜻蛉の御幸寺見おらす日和也

(蜻蛉の屋をとりて)
夕日也

蜻蛉の海より来る舟の音

動かすに早瀬の上の蜻蛉の音

濑観音

線香の烟に向ふ蜻蛉かき

須磨

秋蟬

赤蜻蛉飛ぶや平家のちりぐよ

啼きさるら蟻のいかに秋の蟬

鳴くあまのや淋し十の秋の蟬

秋の蟬朝日よまほふあられあり

蛸

蛸の聲の尻より三〇の月

蛸の鳴いて机の日影かな

蛸や夕日の窓に橙の影

螿螂 螿螂の身は瘦せながら何恨も

病後

きはつと身ハ螿螂の 瘦腕

秋蠅 秋の蠅叩いて見れば叩かす、

茶店

人のろし駄菓子の上の秋の蠅

秋蚊

秋の蚊の泣き聲細く 古寺都邊

秋の蚊の人見てあるよ 卯塔場

秋蝶

命なり小夜の中山 秋の蝶

何事の心いれなきを 秋乃蝶

馬糞み息つく秋の胡蝶かな

秋の蝶羽小ホともるりまけり

冬蝋

をらくと流車を驚く 冬蝋かな

飛びいせで川よ流ちたよ 冬蝋かな

簑虫鳴 簑虫やいより 常夜の扇を鳴く

蚯蚓鳴き童子呼ぶを答なし 只蚯蚓鳴く

秋虫雜

茶碗の圖よ

釜の湯は冷えそ鈴虫ちんちんりり

一葉

つゝわんと坐し居れを桐の一葉落つ
夏瘦の骨まいいとや桐一葉
我るは落ちて淋しき桐の一葉のな
桐の葉の四五枚許り動きく

桐

木槿

夕暮の旅僧通る木槿のな
駄菓子賣の村の酒屋の木槿のな
道むすの木槿またよほころり
道むすの木槿またよほころり
木槿咲く堀や昔の武家屋敷

木槿垣草鞋むのりの小店小

浦屋先生村莊の前を過る

花木槿雲林先生 恙なきや

今出村

花木槿家あり限り 櫓の音

汐風や瘦せし花なき木槿垣

梅屋子別

君が門木槿見て行く別れ

芙蓉 爪紅の手をのべて芙蓉折らんとす

紅葉

露をくして色の子あたる芙蓉は
芙蓉見えそなきがに人の聲ゆかし
松が根にまゐりきたてゝ芙蓉も
芙蓉咲く櫓の袂のや家かな
ハッ時の太鼓打ち出す芙蓉は

笠持つて所化二人立つ紅葉は
紅葉焼く法師は知らぬ酒の醗
人氣なき山の紅之葉や滝の音
砂上手や山をかぶるこ櫃紅葉

馬の沓かおの物櫃の紅葉散
柳樹も紅葉す。木もさのりりり
日表を坼山崩れたる紅葉かな
西くくく奈良の家も紅葉かな
通天の下に火を焚く紅葉かな
夕山の裾も紅葉の小村かな

鴨溪

亭とくくく溪も橋ある紅葉火

詭田川

わら雨や車をいそぐ紅葉狩

白雲紅葉も一火見えそ日暮れたり
銀杏葉難逢ぶ銀杏の下のササ葉かな

柳散

かせを干す紺屋の柳散りみりり
明家の戸も舞の犬や柳散り
古濠や腐つた水も柳散り
断橋流水夕日の柳散りみりり
道後遊廊の岬の柳は一編上
人帯生地と青けり碑のうたれ
かりたるといとうちとけたるまよ

たもと

古塚や恋のまゝたの柳敷の

梨實 川崎や梨を喰ひ居る旅の人

柑子

佛壇の柑子を喰す 嵐火
蜜柑青き北背戸の居風呂屋根さし

木實

鋸蓋子をたたく木の實や流し元
二つ三つ木の實のこぼつゝ音淋し

柞

代々く磔打ちたる木の實のな

柞の實や口むし赤き鳥が来る
柞落ちて犬吠ゆる奈良の横町かな
流柞やあら壁つゞく奈良の町
流柞や古寺多き奈良乃町
町あはて柳の木多し一くまあり
高圓をかかして柳の在所は
柞たかりと並べし須藤の小店は
晩鐘の寺の熟柞の子落つゝ音

村一つ流柳膳子見ゆかな
御所柳み小栗祭の用意かな
塚かよめに凡そ五町の柳畠
駄菓子賣る茶店の門の柳青し

道後

温泉の町を取り巻く柳の小山
柳の木や官司が宿の門 楯

法隆寺の茶店を遊んで

柳と一む鐘が鳴るなり法隆寺
垣ごみ流柳毎と隣かる

栗 焼栗のちねて發く一人かな

團栗 團栗の落ちて沈むや山の池

榎實 一本に子供あつよる榎の實かな

葛 葛の葉や何子驚く夕おとれ
葛の葉の吹きしつすりて葛の花

苳苳 きぬくや苳苳折りて恭らす

まぬぐーやサ舞いおたほひす
まのふ活けし今日サ舞の花もなし
逆上の人サ舞に遊ぶべー
二十日朝顔の花細り
とろつきを朝顔上の柳か
サ舞や来りたくれたる二番舟
サ舞やまのふ死んだよ小傾城
サ舞の花とふ鹿やいつく鳴
サ舞の答うれーや酒の酌
サ舞の餅あたかき差なから
小傾城サ舞の君と申ー

萩

サ舞や裏這いおはる八軒家
サ舞やとてん短き浮世なら
サ舞又一夜とめたる車かな
サ舞のサ鳥よとろつき山家か
サ舞や十日庚らぬ小商人
酒度子ある頃塵よおとづれ
君かサ舞の朝顔は今まかりとら
帰るか朝顔咲きー苗守の垣
石女サ舞の花よりかひかな
風をいそみサ舞の上枝の花もなし

麓のり寺よむ花の五町
さきり散りつ皆露の秋秋の露
馬引くや松の下道 乱れ 秋
傳ふるー山門閉ぢを 秋乃花
ほろくくと石のなるぬ 秋の露
笥のらこぬ水と水を 秋の露
旅人の衣表着て行くや 秋の原
明き寺や取り乱し たる 秋の花
白き水よりまねし枝の尖
と秋らりの雨行も 未よ宿かさん

高き堂寺

太閤の像のまじや 秋の花
頃 戸をそ病を 秋のこら

ものうさわ手すりに倚れば 秋の花
村居 秋荒れて 鷲鳴く松の梢に

薄

山陰や 薄 月ハ月
露の伏す 薄の原の朝日ハ
見泣せむ 薄かちなる山邊ハ
片側ハ 薄少しある小池なる
賣馬の道まお 凡の花 芒

穂芒や跡まはるる先車の音
振かゆ追はれゆく 風の芒か
伏勢の矢尻をうへる 芒か
猪の山尻子向ふ 芒か
箱根路の石落ちる 芒か
田の中や何ぞ残りて 花芒
薄厚月ハ頭の上よあり
花薄しきりに雲の起りゆく
深きちなみあり 先女の墓まどりと
野谷るるめぐりし 数年の星霜は
知らぬ石塔のみみちりて 花を

ゆきぬわて字く初りぬ

女郎花

花芒墓いつれとも見空めず
椽朽ちて狐の穴の尾花か
淋しさに堪へて 廣野の女郎花
裾山や小松が中の 女郎花
掘わりわ此頃をえー 女郎花
一もとは誰か塚をりて 女郎花

男郎花

ハコとハコ 女能役者を見て
男郎花は男かばけし 女かな

芦花

男郎花世を待てる風情は
芦の穂や酒屋へ上る道一つ
芦の穂みけさー上る小川かな
芦の花また根の城に隠れけり
堀割や芦の穂かくれ揺小舟
橋やあらん漁夫歸り行く芦の花
つりーよ茶店の前の草の花
縁日や鉢子裁るたる草の花
崩れけり土橋のおちを草の花
城門やいくさもなきて草の花

草花

芭蕉
雨路もつや朝日斜める草の花
堂崩れて地藏残りぬ草の花
何草を屋根よ花咲く奈良の宿
草の花練兵場は荒れより
草の花少しありけむ道後あり
城跡や風をさぐると草の花
静みさを少し吹かす芭蕉は
かさくと猫の上り芭蕉は
破れ盡す貧乏寺の芭蕉は
大寺の施餓鬼過おたる芭蕉は

六尺の庭にふすかの芭蕉かな
さらしくと白雲の芭蕉かな
石も觸れて芭蕉驚く夜半は
大寺の芭蕉廣がる庭の隅
~~新~~芭蕉の芭蕉
芭蕉破れて縁ふべもあらぬ
芭蕉破れて古池半ば埋もれり
北隣の夢大翁柳つらそす
壁隣 芭蕉に凡のわらうり
芭蕉四五株朱欄の橋のせにゆれたり

秋海棠 石の跡に倚り秋海棠の姿かな
女にびて秋海棠に何思ふ
黄檗の山門 深き芭蕉かな
猿松の裡を 繋ぐ芭蕉かな

桔梗 銅瓶の白き桔梗をたぐり
漱石宮居の一間を借りて
桔梗法けを志げらく 假の書齋

紫苑 竹の蔭に紫苑法けたり 軸は誰

蘭

弓鞞 紫苑生けたり 床柱
八重サ律 甚るゆふし 宿の紫苑は
蘭の香に來し人と 詩つ夕
蘭の香に琴ひく人の聲やい
蘭の香や女詩うたふ 詩は東坡
雨蕭々 蘭の花老いて 黒
百両を蛇もすまぬ 蘭の花

野菊

草の中み野菊ほくちり 一里塚
肥溜のいづくも並ぶ 野菊のうら

葛

道の邊や 荊がくわに 野菊ほく
草ちらく 其中み野菊ほくちり 笑く
野菊やらん 汽車の窓より 見ゆ
きり 屋や日陰の野菊 濡れて 笑く
鉄砲のかすきたり びくと 野菊ほく
葛からむ 侍町の土塚より 此
葛のたかき 窓み 緑の朝日 うち
西側は 葛の窓なり 四思堂半
松の葛もきたならん 紅葉小
藪からふ 寺の土塚や 葛紅葉

雞頭

菅草の法華の寺や雞頭花
雞頭の丈を揃へたる土堤
雞頭の一本残る島かな

穂薺

水せきく穂薺踏み込む野川
畦道の尽きく溝あり
薺の花
溝川を埋めて薺のさかり
薺の穂や裸子桶をよけて行く
土堤の花

露草

牛部庵の露草咲かぬ牛の留守
露草や野川の鯉のさる濁り
虫鳴くや花露草の書のお路

曼珠沙花

道なきわきよありとしたり曼珠沙花
一本五本をいそし曼珠沙花
草むらや土手あり限り曼珠沙花
いよつと葉は牛がら子たか曼珠沙花

葦花

余は村を過つた二十五年の昔思ひ
いふされど

葦花や昔通ひし叔父の家

浦島草

病中

枕もと浦島草を 活けてさう

水引草

彼岸過ぎ 水引草の花さま
かいたや 水引草の花さま

菊

病居士の端居をりり菊の花
昔不昔月の細敷荒れて菊の花
滄浪の水濁りし菊乃花
瘦村の質屋を富みたり菊の花
白も黄も咲きまらべり菊の園
朝霧や奈良殿下る小菊賣
大君のあれすー、日や菊の花
谷川に臨んで菊の宿をいふ
菊作り顔に泡瘡のある男あり
黄菊白菊一とは赤もあらず

白菊の一朶とゆつし八重サ律
菊の花天長節は過ぎたより
菊荒れて日好し蛇去り蛇来り

酒麴

花の月子雪にわけてい菊の香に
愛媛教育雑誌百種の祝ひより
松子菊古きはもつなうのま
百種の満らぐり菊のさきにつけり
小中村博士を悼む
古き香の白菊咲いて手向かな

別れを惜みて

年々や菊の思ひん思われん
大阪にて

奈良

菊はけて荷物りやはる宿を
人形をまがむ小座物菊の花
歸庵

面白く黄菊白菊咲きわたる
同じ夜

白菊のまわりのしこもいば月夜に

暮ら来り

菊の香わ只三人よ夜の更くら

不折来り

繪かきよを見せては庵の作り菊

小児唱
歌の題

君が代ハ菊の花こそ大きけれ

萩

濱萩も隠れて低し——岳が家

白粉花 賤が家子花白粉の赤かりき

鳥山 只一つ高きところよ鳥山

鬼灯

鬼灯をほくと吹きたるは鬘なり

鬼灯の少し赤らむをたらのさ

鬼灯の少し破れたるを口を——き

末枯

末枯み人を恐れぬ 狐かな

末枯の若草山となりみづり

鴉鳴く心根の小草ゆい枯ら

秋茄子 武家町の島よりぬ 秋茄子

秋茄子み小きはよのくらうり

田舎

黠いあれど黠いあれど秋茄子

霞

切賣の西瓜ふなり市の月

病中

敷けむか西風ハ赤し肺わろし

西瓜舟天の河原まつまふり

稲葉

晚鐘や稲の葉末を鳴り候

高縄や稲の葉末の五里六里

稲の花

何とばさくこまらありぬ稲の花

犬山の城をふかたり稲の花

南無大師石手の寺よ稲の花

裏口や出入みさばる稲の花

稲の花四五人後りつあり

真宗の伽藍いかあー稲の花

汽車道をありけむ近し稲の花

山城の残り夕りや稲の花

うぶすなに慄立てたり稲の花

速望

稲の花 今世の海の光りけり

石手寺

二の門は二町奥より 稲の花

豊三年

百姓の家の底より 稲の花

病犯郎ねみ出り

杖よりて町を出るを 稲の花

あゝ寺より

本堂やしら（おけし）を 稲の花

村中の先生顔や 稲の花

稲穂

豊三年や 稲の穂がくれば雀鳴く

稲の穂やよらはあついでいかり

山尺をよと 稲の穂末の白帆か

稲の穂の山嵐みなりし夕か

雨晴れば 稲の穂末の夕日か

稲の穂み姫路の城は暮れて

稲の穂に十里の雨の静か

朝露み 稲の穂波の乱れ

鷺の谷川

稲の穂み湯の町底一 二百軒

稲造

えせ違ふ流車一の行方や稲造
松山の城を載せたり稲造
稲造朝日わつらうまより
四圍路や小山の底の稲造
奈良

一條も九條も見んず稲造

早稲

一枚の田は早稲の穂み分れけり

稲

魚提げて帰る親父や稲の中
稲の香に人居らすやぬ避病院
稲の香の雨ならんとして燕も飛ぶ
ところなく家かたまりぬ稲の中
庄屋敷の棺行く所や稲の中
家高低稲段々に山の傍
むら雨やとつと山崩る稲倉
法隆寺

稲の兩班鳩寺にありてけり
歸京

稲の秋命拾ふて戻りりり

川稲

順禮や稲川よわぶを見て道
子を負ふて女瘦田の稲を川
早稲晚稲川よ東海道長し
道をよや稲川の男こく女
稲川の鎌持つて女見返——の

落穂

も食の代衣に見ゆる落穂か
居が代道子拾ひぬ落穂か

干稲

干稲の上に首出す地藏か
山陰の干稲す晝の日脚
帰京途中

苗代よ出て干稲に戻りりり

稲掛

稲掛けの家をばらしの底

籾干

籾干すや難遊ぶ門の内

今年米雀祝し嵐よろこぶや今年米

叅 城あとの石垣高し 叅畑

守呂を瓢亭に送りし

叅小叅一里半来り別れ

唐叅 唐叅のくろくろ子修し 寺の壁

唐叅の白髪ももなりてありし

粟 粟や菜や裾山島四角なり

山里や箕よ干す粟の二三升

法蔵寺にむら家君の墓を尋

ぬれ今ほ畑中の荒地とけりて

またたきしづら涙の催され

粟の穂のうを叩くをこの墓を

石手寺

通夜堂の前に粟干す日向し

粟の穂も難倒ふや 一構へ

葡萄 葉に虫よとけんたがらし葡萄が

虫飛ぬや葡萄島の薄月夜

雲月
村居

芋

里人よふくしハ許せ芋堀らん
芋ハあれど酒まー月を如何せん
芋も積んで中嶋舟の来りくる
知人ものいも送り来り俵かき

蕎麦

山本や日影ちと見ゆははの花
砂土手や西日をうけて蕎麦の花
蕎麦の花野川の音はく水きり
山本やうしろ上りよ蕎麦の花

蕎麦

山本や雲もうらみ蕎麦の花
山明けぬれも花蕎麦元ハ雲

系瓜

雪隠の窓みぢらりと系瓜かな
五六反叔父がとりし系瓜かな

瓢

蔓長く下ハ瓢の風ルな
蕎麦屋根の右ハ傾くおくべハ
し〜と赤ま色ちり蕎麦株

蕎麦

唐辛子サ戸のまら屋の戸ハ

自著の後み題す

けらりわらもきこて淋しや甘番 椒

ぬかこ ほろくくとぬのぶこるんや 垣根は

牛蒡方 牛蒡方肥えて鎮守の祭近よりぬ

間引菜 間引して緑少き畠かな

茸 茸取つて大聲あぶる女かな

名も知らぬ菌や山のたまり口

顯画

松茸ハにし茶茸ハ可愛らし

松茸 松茸のみずりて青き松葉は

秋植物雜 古の哀や芒の小雨秋の露

恋塚や男芒子女郎花

柳子照り蕎麦子雨ふる畠は

蕎麦の雪棉の霞はわらわらあり

谷あいやろの掛箱 山は柳
川舟の木権の垣根 菊の北月戸
小橋かけて黄菊誰駒を見えぬ

顯画

秋茄子 唐辛子の朱に奪のれぬ

秋二月 奴才病とやまひ今
またのそんで

せりーまや 桔梗子来り 菊子去

奈良

柳赤く箱田みのりり 堀井の内

冬

小春

電信子雀の並ぶ 小春のたま

山門子鹿干す奈良の小春かな

廻廊に錢の落ちたう 小春かな

山底子世と断つ村も小春かな

瘦村に七島舞い落つ 小春かな

黒船子傳馬のたか 小春かな

唐橋子むと大眠 小春かな

雲子近く行くや 小春の真帆片帆

瘦村に見ゆや 小春の 風
病む人の 病む人をとふ小春は
うささーや小春の 蠅の顔につく
病後三句

蜻蛉こひ馴なりし 小春の 端居ハ
あけ放す窓は 上野の小春ハ
春の暮より 入院いんえん— 居いる 屋空やうらの
もとの 蓮はすはす

いたん—や花はなのなわみの小春止
近衛師團凱旋

いん—くむ用もちけ小春の 櫻 花
病中

寐いるやううつつる小春の 蝶の 影許かげもとり

小六月 日影ひかげさす人形店にんぎょうたにや小六月
牛の子うしの子や賣うらわらて遊あそぶ小六月
新嘗祭にいのみまつり

新米にいに菊きくの香かほしある 小六月

神無月かみなしつき 馬鹿ばかななの 祢宜尊ねよしのみこと—や神無月

十月

十月の海、風いたり蜜柑船
十月の海、帆がちに舟勝ち
十月の雀飛びこむほろり
十月の雀も鳥も出てみり
十月の日和み掛けし晩稲
十月や鳩来ひりふ藏の前

初冬

初冬の萩も芒もたをぬり
初冬の鴉飛ぶちり二見
鷗

霜月

冬立つや立たずや留守の一つ家
菊の香や月夜ながりに冬入る

霜月の野の宮残り嵯峨野
霜月や奈良の都のト屋を
霜月や淀の夜舟の三四人
霜月や雲もかくらぬ晝の富士

師走

草の根を氣のかちる師走かな
うららかに追ひゆくや師走かな

艦隊の港子つゞき師走の
夕霧より伊左さま恭の師走は
馬糞も見えぬ師走の日本橋
风光の師走の空の月夜かな
気楽さのおたね師走の草枕
馬の息見えて師走の夜明け

年未

行く年の雪五六尺つゞき
行く年の茶番に似たる人のさま
行く年の四つ橋に灯の往来は

年暮のぬ太平洋の船の中
嵐の暮とも何ともなりよ山の雲
隠れ家の年行かんともせざりけり
思ふこと今年も暮れて一おひきり
山門や浮世なかにむの年の暮
たまたま遊女いらむわ年の暮
蜘蛛の巣のかくて今年も暮れはな
し舟青不知
老待呈画の駒の駒せ今年行く白髪は
大三十日 摺小木や大つごもりを播き廻す
梅はけし青磁の瓶や大三十日

淑石塵子来り

泣りりり大つこりりの来ぬところ
淑石が来て塵子が来て大三十日
淑石来りいさ約あり

梅はけて君待つ巻の大三十日

春近

あかりや一寸わねて春近
春待つや只四五寸の梅の苗

寒さ 大名の通つてあとの寒さ

くらがりの人み逢ふたの寒さ
菫の微の花の此頃絶えし寒さ
水音の枕み落つる寒さ
木のあひみ星のきらつく寒さ
野を行けむこ倉の鉦の寒さ
山風みほくと立つたの寒さ
をりきりと富士の見えたの寒さ
旅の詠をの我みつれなき寒さ
なまじいよ人の逢ふ夜の寒さ
堀越の狐火見ゆる寒さ

雨晴れを凡そ風いで寒さ
母病んで粥をたと子の寒さ
庭の月晝のやうなる寒さ
見上げたる高石かけの寒さ
薄暗き穴八幡の寒さ
又削の四柱漢の軸の寒さ
舟はたよ海のをきたよ寒さ
谷のぞく十綱の橋の寒さ
井藤原の出口よ寒し牢を敷
雲なると空の寒さよ小山

囚人の頭竹助寒さ 馬の上
佛焚いて佛壇寒さ 味噌の皿
寒さうに金魚の浮きし日向小
この寒さ 敵後の人のなつかり
寒き日を書もてはいの 刺かな
寒き夜や妹がり行けん温鈍賣
寒し化と不二見て居るや阪の上

神田橋

石垣や松這い出で、水寒さ

鬼の画

掛けらぬを世よ此世の凡寒し

壯士

肩を張り拳を握り寒さ小

妻香氏の北海道へ行くを送る

二の寒さ北に向いたる別れ小

漱石東来一来りしよ

足柄ハサを寒かつたてふんじま

われ小軍隊歓迎天を招かたて

めをたさよ袴つけたる寒さ小

この寒さ君何地へか去らんよ

狼烟見よ人の寒さや城の上

昔記山川是今傷人代非

このたいた一人で通る寒さ小

冬礼 冬礼 や水なき河の橋長し

冬礼 や小店や蜜柑 薩摩芋

冬礼 や焼場をめぐり 松穀垣

冬日 冬の日の雀下りけり 飯時分

冬夜

冬の夜の稲妻 薄——星の中
一月十六日夜
冬の夜の更けとなるあまのこ

霜夜

金岡の馬静まりし 霜夜小

冬時候

大木のすつくと高——冬の門
音もな——冬の小村の八九軒
冬も今年 秋病あり 古書 二百巻
冬も今年 今年や冬とさうふく

十夜

旅僧のとまり合は 十夜式
月影や外ハ十夜の人通り

御命講

日の人や法師居並ぶ 御命講
佐渡へ行く舟呼びしとを 御命講

神の留守

拍大の片足折れ 神の留守

臘八

臘八や眠たがる目 雲白——

寒念佛 寒念佛

に行きあつたり 寒念佛

通ふなり

又寒念佛 五六人

鉢叩

鉢叩き 敲きしむたる音なり

神送

神送り 出雲一向ふ雪の脚

川松賣

眼鏡橋 門松舟の着きにけり

羊市

羊の市 橋へ出ぬけそ 月夜かな

羊の市 十町許り ぶきけり

雨雲の人より 羊の市

馬の尻子 行きあつたり 羊の市

いそがし 和人押しかけ 羊の市

羊と

西山へ羊とくみ行く一人りな

煤拂

煤拂の 八をたとなふ 女りな

煤拂 神も佛も 草の上

煤とくとおぼしき 船の埃かな

煤をいって無村の幅のくりくり
煤をまのこつた身許せ四思半
煤をらひ又古下駄の流氷来
大佛の雲もついでに煤はらひ
佛壇に凡君敷かけて煤をらひ

奈良

千年の煤もさうさす 佛たち

掛乞

掛乞の留守を叩くや竹の門
大阪や掛乞ばらけ 栲ばらけ

餅搗

餅搗の畑みぎをふ城下から

年忘

年忘れ折々猫の啼いて来

死にかけしころありしか年忘れ

成庭の年忘れ草枯れさす

麥サ時

麦サ時や色の黒サは 娘サリ

麥サ時や北砥部 山の麓まで

爐開

爐開や叔又の法師の参らばぬ

巨燵

巨燵から見ゆるわ橋の人通り
人々を——巨燵の上の草 双紙
縫物の背中より——た。巨燵は
丁雑叱る身は無精さの巨燵は
押——かけて喜ぶたまりし巨燵は
かりそのの苦況をたぬる巨燵は
みちのく此旅籠をたむして巨燵は
晝中の傾城寂た——りり
老いもの戀もし——置火燵

漱石来

何いふこところか——を参らる
風呂敷を掛けたる晝の巨燵から
文机の向きや大桶の置き處
化物よ似てらるる——古火桶
火桶張る若世の白髪かな

火桶

湯婆

傾城のいとり寝ねたる湯婆は
舟子病。遊女の星の湯婆は

炭竈

松伐つて月炭竈よりより

炭賣

名處の炭賣黒く生れけし

炭

鉄子 炭切の妹の手を黒き

炭團

米盡きと炭團たてふ俵から

楮

楮たくりや 楮の嵐 杉乃凡
落武者に驚かされぬ 楮の夢

冬籠

楮の火や 雲子埋もの 木曾の家

冬籠り 達磨は 我をばらむ
冬籠り 金平 本の二三冊
冬籠り 世間の事を聞いて居る
冬籠り そのこゝろ一人おしける
冬籠り 煙のもつ 壁乃六
冬籠り 顔も洗はず 書に對す
冬籠り 書の蒲団のすぢかいた
冬や今年 われ古里にこもりけり

五音四を見れば味噴あり冬は詠
雪のうつく障子の穴や冬はこもり
山も見ず海も見え船も冬はこもり
琴の音乃の聞えてゆり冬は詠
うら若き妻のうら若き冬はこもり
人病んで死のうら若き冬はこもり
なかくこもり病むと力の冬はこもり
唐の書本良の秋見て冬はこもり
あぢきなきや三重の病も冬はこもり
帳の裏の中よつくり冬はこもり

ニ夫婦 ニかりゆり冬はこもり
商人の坐敷の僧の冬はこもり
寺の寺が親子二人の冬はこもり
傾城の文居もゆり冬はこもり
冬は詠書齋の掃除無用なり
達摩積
冬は詠物とはぬ日ハもあらど
あつ山里を思ひいで
一町七山のどん底も冬はこもり

頭巾

頭巾着て人と話すと橋乃上
我親も似てるものやま古頭巾
兜着たまは昔に頭巾か
雑刀に焚火のくつゝ頭巾か
東違ひ又やうかゝ頭巾か
赤頭巾人甘んじて老いけらし
頭巾着て女子似たる男かな

蒲團

短たに蒲團を引けむ猫の聲

紙子

鐘つきの雲も濡れた紙子
子鼠の尿のけけた紙子

細代守

ながらへて八十路子ありぬ細代守
暁や凍えん死なで細代守

凍

手凍えて筆動かさ夜け更けぬらん

霜や

おちおちて人霜やけよわぶか
霜やけや娘の指のおそろいま

靴

脚多き靴多き手迄かな
あがりや傾城老い之上根岸
靴かあがりの手乃悲ろき

風呂吹

黒塔や赤子の腕の風呂吹を
風呂吹の口をやかぬを口き

莖菜

朝霜や猶青臭き莖菜桶

納豆

納豆や飯焚一人僧一人
起きよ今朝叩け納豆小僧ども

薬冷

戸を叩く音は狸か薬冷

糞汁

糞汁心もとるき寝つきは
糞汁一休去つて僧いふ

鷹一匹

鷹一匹の鷹を飼ふる荒野に

冬人草鞋魚精さやの中で豆袋をぬぐ
蒲團

時雨

新発智の青き頭を 初時雨
上人を載する舟あり ちら時雨
旅僧の牛も集つた 時雨は
白菊の少しありらむ 時雨は
稲掛けて神南村の時雨は
雛の子の三早原ある 時雨は
三井寺に汎と湖水の時雨は
いつの間に目をくらくらつて 時雨は
大名の柩めれたる 時雨は
塩鯛の塩はらりと 時雨は

橋ノ夕日竹屋の渡ししゝるる
五ノ艘五平太船のしるる
穂田に三畝の緑をしるる
提灯の見えつかくはらしるる
汽車此夜不二と柄としるる
島守のあらめの衣しるる
土佐の海南もみしるる
~~大佛の鐘が鳴るる~~
大佛の鐘が鳴るる山夜時雨
傾城ハ知らじ三夜さのむし時雨

火とよりの火とよいかねつむら時雨
月やうろ嵐やまこと初時雨
釣舟やしるる歸る鳩の湖
旅人や橋にしるる馬の上
行きつらぬらちにしるる矢まは
月出るやしるる雲の裏手より
花賣の片荷しるる歸りく
大和路は時雨あらし汽車の覆
しがらう紅子傳き薔薇の花
しがらう月代巴に杉の上

— ぐもや上野谷中の杉木を
— ぐもや隣の小松庵の菊
— ぐもや右の亀山星が同
吉原や書のおくまよ小夜時雨
病中
— ぐもや腰湯ゆもみて雁の聲
北白川宮薨御と扇を侍りて
そら涙せまあつぞ金州侍在
陣のゆふ事など只おぼらしの
こころよきとんそ

— ぐもれど脚はま柔らすも
何が— かつらをす

— ぐもつても菊健在に我宿ハ
病の— 可合もつらはず

初— ぐもん君が病いのちが— さい子
謡曲 絃上

盤 歩み— ぐも 須磨の夕外
雲 ちの内の内

京さ— して山の時雨の迷い雲
傾け— 人軍の裏行く時雨の
劍は舞— なたつと— ぐも— 此所かな

風

風や胸の破れー太鼓梅
風や雲吹き流す海のとて
風や船沈みたふりりりり
風や月の光りを吹き散らす
風や海へ吹かす人の聲
風を空へ吹かせて春乃家
風の馬吹き飛ハす廣野外
風の外ハ落葉の月夜外
風に向かて登り此下り此

風や大佛いふを誰耳あり
風やまらく薄まらくと
風や十年賣れぬ古佛
風や鼠の腐れ狐民
風や鹿の餌賣れぬ豆腐売
風や鐘引ますとー道の端
風や滯るとーと滞れつ
風や犬吠え立つ外が濱
い〜と風鳴る庵の空
妖怪体

古御所や風更けて笑ひ聲

悼

風や君がまほろし吹きちらす

十六羅漢図

風に尖らぬ頭をたのりく

から尻の風つよき廣野に

冬の月五重の塔の裸なり

裏山や月吠えて世のまほし何

寒月や猫の眼光の庭の隅

木の影や我影動く冬の月

冬月

寒月か吹き出されて山々の間

寒月や石塔の影杉の影

寒月や雪尽きて猶風をけし

寒月や造船場の裸船

寒月や接子乳子ほく橋の上

雪

金殿のまゝ火細く夜の雪

敷せ之や松の下陰雪残り

武藏野やあちらこちらの一雪の山

くしりく丸木の舟の雪もろく

峠より人の下り来り吹雪外
ちりり向いて塔見あかたの吹雪外
つらやうといつも丸い雪の園
竹藪の梢も遠く雪の山
辻堂も火と焚く傳や夜の雪
元山の雪にもたよりであられり
二三尺雪積む野邊の地蔵が
帰るさや初雪やんで十月
五の軒雪つむ家や枯木を
山甲や雪積む下の氷の音

音もせぶなりぬ吹雪の馬の鈴
高繩と知られり雪の尾上り
古閑や雪ふるも水て鹿の聲
大佛の片肌雪の解けり
世も空へてくや雪の道一つ
杉垣の上も雪持つ小家外
夜道や吹雪に下り四手馬
吹き乱す吹雪の鷹の鈴暮れ
初雪の大雪になり口を
雪ながら山紫の夕かき

夜の雪やせわしく叩く医者の門
雪雲の空またいよす裾野に
初雪の梅の擬寶珠に鳴く鴉
初雪のたらりと降りし小不二火
雪をがら氷の小道や星月夜
雪積むや次第下りの屋根続き
雪空の一隅赤き入日かな
松の雪わらへ落ちる水の中
病中
庭の雪見ゆわ 廁の行き戻り

霞

雪の旅 おろろからんナリながら
送別
炮熖子 豆のたがまや 玉 あん
大佛のおとろきしせぬ 霞 水
雑刀を車輪まはす 霞 水
石橋の上みたまらぬ 霞 水
岩関の岩よけ 飛ぶ 霞 水
旅僧の笠破れたる 霞 水
猪の人をかけたる 霞 水

霰

捨舟の中にたむしの霰かき
ものすこき音や霰の雲をなれ
すさよーや霰ありこむ鳩の海
曉尸 霰のたまよおとー穴
大粒な霰やうらり薄氷
逢坂や霰たむしの牛の角
霰にしろきぬべららり宵の雨
涸れ泥の泥子みぞう夕かな
みぞうや水道橋の薪舟

冬雨

古濠やだらりと冬の雨

霜

鍋の霜日の短きん限りかき
朝霜に日の日井りたる城下かな
朝霜や不二を見出さ廊下口
初霜に負けて倒れし菊の花
初霜や鏡みよりの髪乃上
橋の霜雀が下りて遊ばう
曉や御庭の霜の捨舟
尼寺の鏡かりうり門の霜

まやべつ菜子横濱近し
烟の霜
腰の疾ふかりて
起せども腰が抜けたか
霜の菊
中野道遠を吊ふ
世の中を恨みつくして土の霜

冬日

冬の日やわつかりの雲のすまきに
冬の日や馬の背中よ
落ちかゝる
冬の日
の落ちて明る
一
城の松
冬の日
のくまかおなりし
小村

枯野

一

辻堂のあとに
ありたる枯野かな
満月の半分
出かりし枯野かな
舟曳の斜め
みそりふ枯野かな
鳥飛んで
荷馬登く
枯野かな
辻駕に狐
乗せたし
枯野かな
馬見えて
雛子の
逃けし
枯野かな

冬田

笠帆の白帆よとりの枯野は
村人の都へ通ふ枯野は
己食の鑊錢拾ふ枯野は
鷺一羽をよかに立つる枯野は
のづら〜く女も逢ひ〜枯野は
氣車〜あらはに枯野を走る畑は
五六人行くや枯野の〜つ道
あせ〜許り見えて重なる冬田は
駒込の阪と下れを冬田かな

冬川

氣車道の目標高き冬田かな
料頭よ鳥のとよの冬田かな
氣車道の一段高き冬田かな
見下せむ晚稲の残り冬田は
菜島もまどりて廣き冬田は
冬川よ鴨の毛の〜茶かな
冬川の河原がかりとあり〜
橋枕よ残り〜藻屑や冬の川
雲絶えて源涸れぬ冬の川

水筋ハ潤水て并や冬の剛

冬の水

雲墮ちて沈静まりぬ冬の水

氷

古濠の小鴨も居らぬ氷かたを
瀬の橋裏やいゝ氷かたを
水鳥の小舟子よる氷かたを
元山とつゝらす浦の氷かたを
崖道を氷室へたこぶ氷かたを
—んとして榛名の池の氷かたを

溝川子竹無北りくゝ氷かたを
川橋に水をたなと氷かたを
人住まぬ屋敷の池の氷かたを
まろくくと白水も流つゝ氷かたを
のびわもとの音や旭のさす田の氷
四辻や打水氷の朝日影
氷氷
鶴鶴の川株つたふ氷かたを
小夜更けて氷を叩く隣かたを
曉の氷すり砕く硯かたを

氷柱

旭のさすや 檜の氷柱の長短

霜柱

土とくに崩る 岨の霜柱
枯れ尽す 菊の島の霜柱

鳩

湖や渺ととて 鳩一つ
橋きはへ流氷を来たか 鳩
薄氷を碎いて 鳩の浮きたり

鴨

鴨啼くや 上野の園に横はる
古池や凍りしつかで 鴨の足
鴨ハ見ふながら 味噌汁酒の鯛
搦手や晝妻ししと 漁家の鴨
内縁のみ 小鴨のたよる 日向川
蓮枯れを氷み 眠る 小鴨は